

---

# 世界はアイに満ちている

市原津吹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界はアイに満ちている

### 【ノード】

N1556N

### 【作者名】

市原津吹

### 【あらすじ】

静琉は幼い頃から入退院を繰り返していた。一年という長い入院生活から仮退院をした静琉は、初めて通うことになる高校に胸を踊らす。

親友であり最従姉妹の暁とその兄幸樹に支えられ、ハイスクールライフをエンジョイすることになる。

静琉は真っ青に晴れ渡る空を、ベンチに腰を下ろして眺めていた。いくつもの雲が流れいくのを黙つて見ていた。

何分何秒そうしていたのだろうか。

全く動かない静琉に痺れを切らしたのは、親友で最<sup>はい</sup>従<sup>あわい</sup>姉妹の暁だつた。

「いつまでそうしているの。風邪引くよ」

「もうちょっと」

「あなたのもうちょっとはもうちょっとじじゃないの。早く病室戻るよ」

呆れたように言う暁に静琉は苦笑した。

「」のまま体調がよかつたら仮退院出来るんでしょう？ 体調が悪化して出来ないなんてことは、バカのすることだよ

「分かつてるよ」

悪態を吐きながらも、その言葉の端々に優しさを感じた静琉は嬉しそうに笑つた。

長い病院生活で、欠かさず会いに来てくれる暁に静琉は感謝した。実の両親でさえ、今は滅多に会いに来ない。忙しいというのは知つているが、それが少し寂しかつた。

「分かつてるんなら今すぐ病室に戻る！」

「だつてあそこ、息が詰まりそうなんだ」

「あんたねえ、それで付き合わされる」「ちの身にもなってよねー」「痛いよ、暁」

耳を引っ張りながら言つ暁に、静琉は嬉しそうに笑つた。急かす暁に何も言わず、大人しく静琉は病室に戻つた。

真つ白な四角い部屋。

壁を見ても白、天井を見ても一面白いその部屋を見た。

いつからだらうか、この部屋を息苦しく感じるようになつたのは。

天井を見上げながら、静琉は自分の思考に耽つていた。

「静琉、あたしそろそろ帰るね」

「うん」

「いい？ 大人しく寝てなよ？」

念を押すように言つ暁に、静琉は笑つて頷いた。

安心したように溜め息を吐いた暁は、椅子に掛けっていたバックを手に取つた。

「バイバイ」

それだけ言つて暁は帰つていつた。

「バイバイ、か」

静琉は苦い思いになつた。

バイバイ、その一言は静琉の嫌いな言葉だつた。

見舞いに来る人間の大半が口にする言葉。

その言葉を聞くたびに自分には明日が来ないのでは、と恐怖に駆られる。

「バイバイなんて嫌いだ……」

抱えた膝に頭を埋めて静琉は呟いた。

鳥の囀りはいつだって心地良い。  
チチッと鳴く鳥の声で静琉は目が覚めた。

「……ん……」

未だはつきりしない頭に、目を擦りながら何度も瞬かせると、窓際  
に人が立っているのに気付いた。  
日の光で陰っているその人物は、久しく静琉の前に顔を出すことは  
なかつた。

「……父さん」  
「起きたかい？」

久しぶりに見たその顔は、変わらず人好きのする笑みを浮かべてい  
た。  
どれほど会つていなかつたのか、静琉はそれでも来てくれた父に笑  
みを浮かべた。

「どうしてここに？」

「先生に呼ばれてね。ついでにお前の顔も見て帰らうかと思つて」

先生 それは静琉の担当医師である。  
父が呼ばれたということは大事なことではないだろうか、不安げな  
表情を浮かべる静琉に父 孝昌は笑つた。

「そんな顔をすると」とないだろつに、静琉

「……だつて……」

「大したことじやないから安心しなさい」

そう孝畠に言われても静琉の心は落ち着かなかつた。

「本当だ？」

「本当だよ。父の言葉が信じられないかい？」

悲しそうに眉を下げる孝畠に、静琉は慌てて首を横に振つた。

孝畠の悲しそうな顔はどうも苦手だ。

静琉は孝畠に似た顔で、苦笑した。

「先生の話は何だつたの？」

「最近調子が言いそうだね？」

「うん、まあ」

「安心したよ」

そう言つて孝畠は窓際から離れて静琉の側に立ち、頭を撫でた。どこのか不器用なその手付きに懐かしさが湧いてきた。

「先生があと一週間、今の状態を維持していれば仮退院してもいいそうだ」

「つー？ 本当…」

孝畠の言葉に、勢いよく顔を上げると驚いたよつて手を丸くする孝畠の姿があつた。

「本当だよ」

「あと一週間」

壁に掛けてあるカレンダーを見ながら、静琉は呟いた。

やつとこの部屋から解放されるんだ。

静琉の胸には、その思いが一番強くあった。

「絶対退院するよ、その日！」

「じゃあ体には気を付けないとね」

「分かってる」と頷くそん顔には、喜びが浮かんでいた。  
一週間短いようで長いその先が待ち遠しくて仕方なかつた。  
孝昌は体一杯で嬉しさを表す静琉に微笑んだ。

一日、一日。

一週間などあつという間だと想つていた静琉は、あと数日待つのも億劫になつていた。

暁もここ数日は顔を出しに来ていない。

静琉は暇で仕方なかつた。

自分が持つている小説はすでに全部読破していた。

「暇だ」

ポツリと呟いて、枕に顔を押し付けた。

一眠りしようかと思つても、睡眠の取り過ぎで眠気など一切襲つてこない。

「暇そうだね？」

「あー、鳥居先生」

静琉の担当医が入口に立っていた。

「定期健診に来たよ」

聴診器をブラブラ揺らしながら静琉の前まで来た鳥居は笑った。

「調子はどう?」

「結構いいですよ?」

「じゃあ楽しみかい? 仮退院」

聴診器を胸に当てながら聞いてくる鳥居に、静琉は力いっぱい頷いた。

「もううんー」

あと数日で仮退院、そしてそのまま本退院になればと静琉は思った。他から見れば小さなことだろうが、二年もこの病院に缶詰にされたいた静琉にとって仮退院・本退院は大きなことなのだ。

「……本退院は無理そうだけど」

小さく呟いたつもりの声を鳥居は拾い、「本退院かあ」と言つた。

「本退院はちょっと無理かな」

眉を下げる鳥居に静琉は唇を尖らせた。

本退院が無理なのは静琉も百も承知なのだ。少しごらりと夢を見たつていいじゃないか、と鳥居を睨めは困つたようにな笑つた。

「じゃあ本退院したいんだつたら早く治さんといとね」

胸を指差しながら言つた鳥居に、 静琉も力なく頷いた。

部屋を出て行つた鳥居を見送り、 静琉は視線を下げた。

ギコツと胸元を握り締め、 唇を血が出るのではないかといふぐらい強く噛んだ。

「…………どうしてなんだろ？」

力なく呴かれたその言葉は、 静琉しかいない部屋に静かに木霊した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1556z/>

---

世界はアイに満ちている

2011年12月5日20時51分発行